

ビオンにおける Container/Contained 論の変遷

青 柳 寛 之

The Vicissitudes of Bion's Conception ; Container/Contained

AOYAGI HIROYUKI

はじめに

英国の精神分析家 W. R. Bion の Container 論は Winnicott の holding, management 論とともによく言及される。主な理由は、それまで、特にクライン派では精神内界のみが重視されていたのが、Bion の Container 論をもって初めて外界との相互作用を考察できるようになったことによる (Spillius, 1988)。このクライン派内の流れの中での意義は、より広く心理臨床を考えていく上でどのような助けになるだろうか。また Container 論の意義はこれにとどまるのだろうか。この点を検討するためには、多くの研究者が Container を論じている中で、何よりも Bion 自身が Container 論をどのように着想し、それがどのように変遷していったかを吟味する必要があるのではあるまいか。そこからどのようなインパクトが得られるかに、本論の主眼を置いてみたい。

なお、Container/Contained の訳語には、これまでに「容器 / 内容」「包むもの / 包まれるもの」などいくつかあり、定訳をみていない。従って本論では原語のままの表記とする。また、引用が多い文献については、文献欄に示した略号を用い、ページ数を示した。

I 思考のための装置の基本要素としての Container/Contained

1. 思考理論の構想 —— 作業道具としての理論 ——

A theory of thinking (1962, 論文), Learning from experience (1962, 単著) から以降、Bion はそれまでの臨床的論文から一転して抽象的色彩の濃いテーマを扱うようになる。その内容は思考生成のメカニズムとそれを探求する上でのモデルの構成であると言えるが「使うことが意図されていることが哲学理論とは異なっている (TT)」と自ら断っており、加えて「実際に分析を行う者が未知の何かについて考えるという問題を和らげるための作業道具である (LE, 89)」と述べている。このような作業道具としての理論を一般的な精神分析理論とは区別して「機能の理論 (LE, 第 1 章)」、「精神分析の観察理論 (EP, 第 1 章)」と呼んでいる。Container/Contained 論はこのような大きな構想の中に位置づけられる。その意味は徐々に明らかになっていくであろう。

2. Container/Contained

Container/Contained は Melanie Klein の「投射による同一化 (projective identification)」理論を背景とするモデルである。すなわち「幼児は心の一部分、つまりは悪い感情をよい乳房の中に投射する。そのうちに悪い感情は取り去られ、再取り入れされる。よい乳房にとどまっている間に、再取り入れされた対象が幼児の心に耐えられるようになるという道筋で、悪い感情は修正されたと感じられる(*)」というモデルである。そして「上の理論から、モデルとして用いるために二つの概念を抽象しようと思う。ひとつはある対象が何かの中に投射されるという時の Container, もうひとつは Container の中に投射される対象である。後者を Contained と呼ぼう (LE, 90)」と、ここで Container/Contained が定義される。また、Container として投射を受けとめ悪い感情を取り去り幼児に耐えられる形にする機能に対して、母親の「夢想 reverie」というモデルが用いられる。このように、その起源においては「投射による同一化」が Contained に、「夢想」が Container に対応している。従ってこれらの含意を少し詳しく見ていくことにする。

3. 投射による同一化

Klein (1946) のもともとの記述は次のようなものである。幼児は母親への空想上の攻撃として、危険物(排泄物)を自分の中から追い出し、母親の中へ追いやろうとする。排泄物とともに自我の一部もまた、自我の悪い部分として分け隔てられ母親の中に投射される。そして排泄物と自我の悪い部分が対象を傷つけると同時に、対象は自分の一部(悪い自己)として支配される。「この結果、攻撃的な対象関係の原型を確立する同一化の特殊な形が導かれる。これらの過程については『投射による同一化』という言葉を提案したい」Klein のこの記述では、対象への攻撃と支配(そして自他の混乱)が、特に幼児の視点から描かれていて、それを被る受け手のことは考慮されていない。これに対して 2. (*) で示したモデルには投射を受けとめて悪い感情を改変する受け手が想定されている。この、Bion による修正版の意味は小さくはない。受け手を考慮に入れることで、投射による同一化のもつ意味は幼児—受け手の関係性で決定されるという帰結が導かれる。Klein の描いた幼児は憎悪に満ちており、投射による同一化という機制自体も攻撃に関わるものであった。しかし Bion による修正版では、受け手の働きによってコミュニケーションの機能を担っている。ではコミュニケーションの成否に関わる要素は何であろうか。これは受け手側の機能の良否と投射側の機能の良否とに分けて考えることができる。まず投射側について検討してみよう。

Bion は投射による同一化の機制を「考えること thinking」の起源であるとする。その最も原始的な働きは心から増大した刺激を取り除くことである。これは増大した刺激を受け手の中に入れることができるという万能空想を伴う。Bion はここに Freud の快原則の働きをみる。快原則が投射による同一化が働く動機となる。しかしこのままではコミュニケーションの成否はすべて受け手にかかることになる。いかに原始的であろうと、投射による同一化には現実原則が働いているというのが Bion の見方である。では投射による同一化における現実要素とは何であろうか。「(投射による同一化は) 初歩的で萌芽的な現実感覚の働きを通してなされる。そういった現実感覚は通常は万能空想なのだが、現実的に働く。(…) 現実的な活動としては、幼児が取り除きたいと望む感情を母親の中にわきあがらせるために合理的に計算された行動として現れてくる (ST,

114)」このように、意図したとおりの感情を相手の中にわき上がらせるという点で、現実原則が働いていることになる。これが投射側の機能の良否を決定する要因となり、コミュニケーションの成否に影響を及ぼす。Bion は投射による同一化に伴う万能空想が働いていると思われる患者については、その空想と現実を対応させる能力がどの程度あるかを判断するのが重要だとしている。

4. 夢想・ α 機能 —— 投射による同一化の受け手 ——

投射による同一化の送り手は意図した感情を受け手の心の中にわきあがらせる。では受け手の働きはどのようなものだろうか。2. (*) のモデルでは「投射を受けとめ悪い感情を取り去り、幼児に耐えられる形にする」ことであった。ここで Bion は母親の「夢想」を手がかりとして用いている。「夢想」とは、母親が泣いている赤ん坊を抱いて色々と思いを巡らし、なぜ泣いているかを想像することである。おなかが空いているのか、ウンチをして不快なのか…。赤ん坊にとっては得体の知れない不快感が変形され、おなかが空いているなら母乳が与えられる。母乳が身体的安寧を与えることにかかわるのに対し、夢想は愛情（すなわち心的要素）に関連する。この例では、空腹が満足に、それと同時に苦痛や不安が活力や確かさに変形される。

ここにいくつかの要素を見て取ることができる。まず①未消化なもの→消化されたもの、という変形が挙げられる。未消化とは思考や心にとって未消化ということで、赤ん坊が自分で夢見たり考えたりすることができない要素である。これは投射による同一化によって排出するしかない。Bion はこのような要素を β 要素と呼んでいる。これに対して消化され、夢見たり考えたりするための材料となる要素を α 要素といい、 β 要素→ α 要素の変換を担うのが α 機能である。「夢想」は α 機能の一因子である。ここでは排出以外の目的に利用できない要素を赤ん坊に利用可能にしている。②耐えられないもの→耐えられるもの、という変形。つまり強烈な感情の「解毒」。これは消化の一要素である。「感情があまりに過剰だと拘束性や排他性が強い構成要素の成長が駆り立てられるが、 β 要素はそういった過剰を取り去られる (EP, 27)」つまり刺激のうちの有害な要素が取り去られ、建設的な側面のみが返される。③赤ん坊の状態を母親が「代わりに」意識すること。赤ん坊は自分の状態を意識することも、それに無意識であることもできない。意識と無意識の区別は α 要素が蓄積されて夢見ることができるようになって、初めて可能になるからである。従って赤ん坊に何らかの感覚データがあったとしてもそれを利用することはできない。母親は夢想により自らの α 機能を赤ん坊に貸し与えることになる。④受け取り方に選択性がないこと。「夢想は、愛する対象に由来するどんな『対象』をも自由に受け取る心の状態である。従って乳児がよく感じていようが悪く感じていようが、その投射による同一化を受け入れることができる (LE, 36)」これは感情の受け取りの守備範囲にかかわるであろう。

Bion は「受け手」の機能を α 機能とし、夢想を手がかりとしてその機能の仕組みを主に論じている。従って機能の良否に関する要素にはほとんど触れていない。しかし①～④の要素から推論することはできる。①赤ん坊に利用可能な形を見つける能力、②強烈な感情を和らげる能力、③赤ん坊の状態に気づく能力、④受け取る感情の守備範囲の広さ、ということになるであろう。

このように幼児の萌芽的な意識と母親の夢想の間で、投射による同一化を通した相互交流が行われるというモデルができあがる。幼児は自らが欲求不満に耐えられなくなると投射による同一

化に訴え始める。これは現実的な場合もあるが、その有効性は母親の夢想の能力にかかっている。もし母親が失敗すれば、萌芽的な意識が欲求不満に耐える能力は、さらに試練にさらされる。今度は幼児の萌芽的思考の欲求不満耐性が、相互交流を支える要素となる。このようにして、内的要素と環境要素の双方を考慮に入れることができる。

5. Container/Contained から♀♂への抽象化

次に Bion は投射による同一化とその受け手のペアからそのパターンのみを抽出する。その表記には、道具としての適用範囲を拡大するために数学の未知数になぞらえて Container→♀, Contained→♂という記号を用いている。基本的な性質（または定義）は次のようなものである。「Container と Contained は、感情による結合と浸透の影響を受けやすい。ゆえに結合されるか浸透されるか、もしくはその両者によって、Container と Contained は通常、成長と記述される形で変化する (LE, 90)」♀♂のこのような関係を共在 commensal と呼ぶ。その意味は「♂と♀が片方への危険なく、相互の利益のためにお互い依存していることである。モデルを用いれば、母親が経験から利益を引き出し心的成長に到達する。また幼児も同じように利益を取り出し成長を達成する」♂♀のこの共在関係を幼児が取り入れ、 α 機能の一部となる。また、♀♂は思考の発達にも適用される。Bion は前一概念 (pre-conception) と概念化 (conception; 受胎という意味もある) の組を示している。前一概念は数学でいう未知数に対応する。考えることはできるが知ることはできない。言葉だけがあって体験の対応がまだなく、それを待っている状態である。この前一概念 (♀) が適切な感覚印象 (♂) と結びつくと概念化が生じる。

6. ♀♂の成長モデル

母親の夢想能力の増大と類比すると、♀の成長は感覚印象を取り入れ消化する能力の増大であると考えられる。また♂の成長は、感覚印象に気づく能力の増大である。幼児はある感覚が耐えられないがゆえに母親の中に投射する。つまり耐えられない感覚があることに気づいており、それを伝えている。Bion の示す♀♂の成長モデルは非常に抽象的なものである。

「♀は集積によって発達し、一連の結合した管を生む。その結果が網状組織で、組織の隙間が管、網状組織の網の目を形づくる糸は感情である。(…)『この空白を満たせ』という形の質問項目を比喩として借りれば、管は質問項目の空白部分に例えることができる。この質問項目の構造には、空白と組になるものとして、網状組織を結びつけている糸がある (LE, 92)」これは感情によって空白が結びつけられている状態である。空白は前一概念のことと考えてよいだろう。あるまとまりがある空白をたくさん持っており、しかもそれを自由に組み合わせ直すことができる状態である。それにより孤立した出来事は他の要素と結びつけられて意味を持つことになる。

「♂の成長モデルは培地である。その中では嘘が『内容』を棚上げにしている。『内容』は未知の基礎から突き出してくるものとして理解されねばならない。2次元のイメージが放物線によって与えられる。♂と♀が共在関係にあるときの培地は、疑問に耐えることができる。つまり発達途上の♂は、妄想分裂態勢にありながら迫害感のないときの要素に類似のものとして視覚化することができる。それは要素が凝集していないように見える状態として、ポアンカレが記述し私が引用した状態である (LE, 92)」非常にわかりにくい記述である。沢山の感覚データに気づいては

いるが、前概念と結びついていない状態、日常語で言えば、言いたいことは一杯あるが言葉にならない状態、疑問を沢山抱えている状態が想像される。このような状態は不確かな感覚（妄想分裂態勢）を強めるが、それを脅かし（迫害感）と感ぜないで、そのまま抱えていられる力をさすのではあるまいか。「嘘」は前概念との対応が未解決であることを示していると思われる。

Bion は♀がさらに成長した先に、科学的演繹体系を想定している。これは科学的仮説のすべてを含むものと思われる。これに対して♂の成長した先では、無限の感覚を抱えることが必要とされる。これは後の“O (Bion, 1965)”やⅡ-4の神秘家の議論に引き継がれる。

7. - (マイナス) ♀♂

♀♂の機能が反転したのが-♀♂である。ここで最も重要な働きをしている要素は羨望である。Klein (1957) は羨望を、幼児の初期の情緒生活に悪影響を及ぼす因子として強調した。いくつかの要素を考えることができる。①自分以外の人（幼児にとっては乳房）が自分にとって望ましい属性や能力をもっていると感じられること。②その人が自分だけでそれを楽しんでいるように見えたり、そのありさまが自分に何か意地悪をしているかのように感じられること。③この、自分をフラストレートする相手の能力または属性を奪い取るか、損ないたいという衝動が湧いてくること。④奪取か破壊を成すことで、相手に対する支配と優越を維持すること。「最も深い意味からすると、母親の創造性を破壊しようとするのである (Klein, 1957)」この記述は、フラストレートする乳房—それを憎む幼児のモデルからなっている。Bion はこれを変形して、幼児の方に死にかけているという差し迫った恐怖があり、それを投射による同一化の機制を介して伝える場面を想定している。投射による同一化の機制のために主客が逆転し、迫害的で残忍な乳房—怯える幼児という形になっている。

「幼児は恐怖の感情を分け隔て乳房の中に投射する。それと一緒に、動じない乳房に対する羨望と憎しみをも投射する。羨望は共在関係をあらかじめ排除する。(…) (-♀♂における) 乳房は、死にかける恐怖の中のよいものや価値ある要素を妬んで取り去り、無価値な残り物を無理矢理幼児の中に押し戻すと感じられる。死にかける恐怖に始まった幼児は、結局は言いようのない恐怖を抱えることになる (LE, 96)」 「動じない乳房」は、♀♂が共在関係の時は安心感につながる。しかし-♀♂では幼児は乳房を破壊しようとしているから、乳房がそれに動じないということは幼児の効力感をそいで優越感を脅かす。従ってフラストレーションはますます亢進することになる。また「死にかける恐怖の中のよいものや価値ある要素」とは、生きようとする意志やそれを訴える活力である。「死にかける恐怖が存在する前にまず生きる意志が必要だが、この生きる意志こそが、羨望に満ちた乳房が取り去ってしまう『良さ』の一部である (LE, 97)」 ♀♂の場合は死にかける恐怖のみが取り去られるのであった。しかし-♀♂では生きる意志が取り去られ残り物が押し戻される。このように価値あるものが取り去られることを Bion は剥奪と呼んでいる。

Bion は-♀♂に見られる特徴として、無一性 (without-ness)、道徳性の強調と罪悪感の喚起、を挙げている。無一性とは、あらゆる良い属性が羨望によって剥奪されて、ついには空虚な優越性—劣等性を表わすだけとなり、最終的には全くの無になることを指す。羨望と優越性—劣等性の結びつきは上記④で述べたとおりである。優越性を示し続ける結果、破壊すべき何物もなくなった状態が「無一性」である。道徳性の強調も同様の起源を持つ。「あらゆることに欠陥を見つ

けることでその優越性を主張する。最も重要な特徴は、人格におけるいかなる新しい発達にも憎しみを向けることであり、新しい発達は滅ぼされるべき競争者であるかのようである (LE, 98)」。Bion はこれを科学的態度に対する道徳性の優位と呼んでいる。これを言い換えると-♀♂の本質的能力は罪悪感を喚起する力である、ということになる。罪悪感は投射による同一化が働いている場面では妥当なことである。救難信号として相手の中に喚起され、その苦境の意味が読みとられる。しかし-♀♂では主従が逆転して、罪悪感喚起能力が本質になる。

♀♂関係が互いの利益になるのに対して-♀♂は相互破壊的である。-♀♂は優越性を主張してその意味を奪うためだけに♂を収集する。分析家の解釈はまさにそのようにして意味を奪われる。これは♀♂が意味を獲得していくのとまったく逆の過程である。従って抽象化ということの持つ意味も両者では異なっている。♀♂では抽象化と具体化を行ったり来たりすることができるが、-♀♂では不可能である。-♀♂で一見抽象化に見えるのは、具体例からの意味の剝奪だからである。従って-♀♂では抽象化と言わずに剝奪化というのがふさわしい。

II 精神分析的観察の道具としての♀♂

1. ♀♂モデルの組立てから道具としての使用へ

ここまでの議論の主眼は、思考の生成に関するモデルを作ることにあった。すなわち♀♂モデルの構成である。続く“Elements of psycho-analysis (1963)”では、♀♂は「精神分析の要素」として取り上げられている。そして“Second thoughts (1967, 特に最終章の commentary)”“Attention and interpretation (1970)”では、♀♂モデルはそれまでとは異なった形で記述される。道具であることが強調され、♀♂パターンの使用法の記述が前景に立つ。Bion は♀♂モデルの作成過程から、♀♂という抽象記号を用いて Container や Contained という言葉が元々持つニュアンスを消そうとした。♀♂パターンもしくは関係性のみを純粹に抽出し、数学の X や Y などの未知数同様、同じパターンを持つあらゆる場面に適用可能にしようという意図のゆえである。その意図に沿い、♀♂という道具の仕組みからその使い方へとテーマが変化していく。

「(♀♂に暗示される) 性的結合のモデルは観察者の注意を絶えず繰り返されるパターンに向けるのに役立つ。これら要素はその組み立て方によってさまざまな形態をとるが、それは『集団の中に』『人の中に』『分析の中に』『行動化 (acting-“out”)]』『発言, 言葉, 表現の中に』などの形で指し示される。(…) 単に言葉の表現形のことを言っているのではなく、言葉による公式化、視覚イメージにおける現実化 (…) に現れる“形態”のことを言っているのである。重要な要素は、この形態が現れたならば漏れなく認識すべきだということである (ST, 141)」

2. ♀♂の関係性を示すカテゴリーの変化

“LE (1962)”では♀♂の関係性は、♀♂ (commensal; 共在関係) と-♀♂の2通りであった。♀♂がうまく機能する場合とまったく逆に機能する場合である。ところが“AI (1970)”では共在関係に加え、共生関係 (symbiotic)、寄生関係 (parasitic) を挙げており、カテゴリーの内容にも変化が見られる。寄生関係は-♀♂に対応する。羨望が支配的で、♀♂がお互いを破壊し合う関係である。しかし共在関係に割り振られていた「相互の利益のためにお互い依存」している、

という定義は共生関係に移動した。共在関係には、相互に無関係で無害、という定義が当てられている。♀と♂が互いにまだ接触していない状態である。接触が起きれば共在関係は変化する。「もっと普通の言葉で言えば、『発見』が脅かすとき、危機的状況が生じるということである (AI, 118)」「発見」は科学的発見であればそれまでであった理論の整合性を破壊するし、分析場面での発見は人格のまとまりを脅かす。共生関係と寄生関係が「発見」の衝撃によって何らかの動きを見せている状態であるとすれば、共在関係はいわば波風が立っていない状態である。心的成長にとって共生関係がプラス、寄生関係がマイナスであるとすれば、共在関係はゼロである。

3. 言語形式と感情または活力の葛藤

言語に関しては前概念 (♀) と感覚印象 (♂) モデルがすでにあるが、ここではその強調点が移動している。前概念 (♀) と感覚印象 (♂) モデルでは♀♂機能が成功したときに概念が生まれるといった、仕組みの記述にとどまっていた。しかし次に引用するのはむしろ♀♂機能の失敗した場合 (-♀♂) で、♀♂が強烈な緊張関係のもとに置かれていること、それに付随する感情を示している。♀♂の適用により見えやすくなるパターンの一例である。Bion は次のようなモデルを示している (AI, 94)。何かを言おうとする人が、自分の経験や感情を言語という形式に“contain”しようとしている状況。これは自分自身のコントロールを失いそうになった人が、自分自身を“contain”しようとしている状況や、敵の軍事力を与えられた帯域に“contain (牽制)”しようすることになぞらえることができる。これがうまくいって感情や経験を言葉で完璧に表現できたらどうだろうか。その人の感情もしくは経験 (♂) は話し方 (♀) の能力の発達に益することになり、逆に話し方 (♀) の能力はその人の情緒 (♂) 発達の助けとなる。これはII-2で示した共生関係に対応する。しかし臨床現場では次のようなダイナミズムの方がよく観察できるのではないだろうか。両方とも寄生関係の例である。

「言語表現は形式化が行き過ぎていたり、厳密過ぎたり、すでにある観念で満たされ過ぎていることがある。その結果私が表現したいと思う観念は、すべての生命をその言語表現に絞られ取られてしまうことがある (ST, 141)」ここでの「観念」という言葉は「意味」とほぼ同義である。すなわち言語形式 (♀) と観念または意味 (♂) の葛藤である。しかし形式が勝ちすぎて葛藤になっていない。表現を厳密にしようとするほど、観念の活力にはマイナスになる。-♀♂の性質から推論すると、言語形式は観念の活力を、形式を破壊するものとして憎み、常に観念の活力を取り去ろうとする恐ろしいもののように感じられるのではあるまいか。次の引用の「意味の剝奪」はこのような文脈で生じる。「患者は偶発事件 (コントロール喪失のこと; 引用者) を避けるためにある表現形式に訴えるが、それはあまりに退屈で、伝えたい意味を表現するのに失敗している。ゆえに全く目標に近づいていない。彼の言語公式は消耗して打ち負かされる軍隊になぞらえることができる。(…) その患者が懸命に表現しようとする意味は、意味の剝奪に遭っている。彼は言語表現のために舌を使おうとしているが、それは口の中のマスターベーション的運動に舌を使いたいという願望を“contain”するのに失敗している (AI, 94)」最後の文章は、活力を取り去ることや意味の剝奪についての別の表現である。口のマスターベーション的運動は活力に関連する。これは投射による同一化における、快原則と現実原則の併存に対応するであろう。

形式と活力の葛藤において、活力が強すぎる場合はどうだろうか。「私が表現したいと思う意味

が、何とかそれを contain しようとする言語形式に比べて力と活力がありすぎて、Container としての言語を破壊してしまうこともある。その結果は引き締まったコミュニケーションではなく支離滅裂 (incoherence) になる (ST, 141)。「感情は言語公式を貫き通し散乱させる。それは敵の軍事力が、懸命にそれを“contain”しようとしている (味方の) 軍事力を貫き通しているかのようである (AI, 94)」この場合背景にはどんな感情があると推測できるであろうか。羨望についての Klein の記述を思い起こして頂きたい。活力が強ければ強いほど、それが形を持つことは活力をフラストレートする妨害と感じられ、従って言語形式は悪いものと感じられる。こうして言語形式は捨て去られ、破壊されて支離滅裂になるか、直接に行動に移されるであろう。

このように♀♂を適用し、その関係を推定することでそれまで見えていなかったことが見えてくる。それを臨床場面の事実と突き合わせることで観察の範囲がかなり広がるのではないだろうか。Bion は♀♂の適用範囲をさらに拡大している。

4. 集団現象 —— 神秘家とエスタブリッシュメントの葛藤 ——

♀♂を論じるのになぜ集団現象が出てくるのだろうか。Bion は大学で近代史を専攻しており、また分析家キャリアの初期の頃は小集団に精神分析の方法を適用していた。集団現象への関心は途絶えることがなかったのであろう。Bion の説明では、集団現象の中に♀♂のパターンが繰り返されており、それを公式化または抽出するとしている。もうひとつは、♀♂は抽象化の度合いが高く、その分適用の範囲は広がるが、あまりに抽象的すぎて使いにくいという欠点がある。その欠点を埋めるために物語の形を用い、公式適用の手がかりのための具体例として集団現象を用いている。従ってこれは♀♂モデルの集団への応用ではない。「社会学や政治学への応用と考えるはならない。そうではなく、寓話や神話学的構成の方法を用いているのである (AI, 114)」あくまで主眼は分析場面での発見に寄与することである。集団を用いる利点ももう一つある。それは集団では原始的感情が容易に活性化する (Bion, 1961) から、そこで働く感情を見だしやすいことである。

集団モデルにおいて♀♂に対応するのは神秘家 (mystic; ♀) とエスタブリッシュメント (♂) である。「神秘家」という言葉は、天才や救世主などを含めた総称として用いている。その能力は集団によってさまざまだが、たとえば宗教的・科学的・芸術的“である”ことを直接経験できる人である。宗教教団であれば神と直接接触または一体化できる人を指す。Bion はエックハルトやルリアそしてキリストを挙げている。科学者集団ならばアインシュタインのように革命的な発見をした人を挙げることができる。精神分析の分野ではもちろんフロイトがこれに当たる。心理療法家集団一般でいえば、新しい治療法の創始者がこれに当たるであろう。神秘家は傑出した能力を持つが故に、その影響力は集団の既存の秩序にとって創造的かつ破壊的なものとなる。このふたつの側面を分離することはできない。たとえばダーウィンが進化論を発表したときの集団の反応を考えてみるとよい。賛否両論が巻き起こり、集団は動揺したはずである。「神秘家」という言葉はこの機能に対して使われている (♂の成長を参照)。

エスタブリッシュメントは集団のいわゆる指導者階級を指す。その使命は神秘家を発見し、通常的能力しか持たない (直接経験のできない) 成員にその代理物を供給することである。代理物とは宗教であれば教義、科学であれば法則を指す。これにより一般の成員も神秘家の発見を利用

することができる。また、その集団の一員であるという感覚を得ることができる。つまり神秘家と一般成員をつなげる役割を持つ。集団をまとめて正当説を識別し、教科書や解説書、「入門」書と呼ばれるものを作る人たちはこれに当たる。このパターンを個人に適用すれば、どの人も神秘家の機能とエスタブリッシュメントの機能を持っていることになる。すなわち“ひらめき”とそれを生み受けとめる準備態勢である。

個人内の神秘家機能とエスタブリッシュメント機能について書いたが、集団の重要な役割として、この両者を分離することが挙げられる。つまり個人内の、神に通ずる部分と普通の人間としての部分の大きな隔たりを認識することである。それは神秘家と普通の人間とを弁別することと平行関係にある。また、集団の理想（集団の創始者の全能を背景とする）と、現実のありのままの集団の状態とを区別することとも関係がある。個人内の分離の達成はその個人の仕事でもあるが、集団の任務でもある。この指摘は重要で示唆するところが大きい。例を挙げれば、ある領域の入門者に、その領域での最終到達地点と、その入門者の現在の状態を示し、その膨大な距離を知らしめることである。これに失敗した場合次のようなことが考えられる。入門者が最終到達地点（つまり理想）に完全に同一化し、あたかも理想の体現者であるかのように振る舞うことである。すると入門者の現在の状態は忘れ去られ、学ぶことができなくなる。集団の任務はこの分離を成員の中に維持することにある。すなわち神秘家とエスタブリッシュメントの間の距離を維持し、葛藤関係を維持することである。

神秘家と集団の葛藤が描くパターンは時間と空間を超えて反復されている。神秘家の集団に対する影響力は創造的かつ破壊的である。実際に既存制度の破壊を叫ぶ神秘家もいるが、そうでなくても破壊的性質を持つことには変わらない。集団、中でもエスタブリッシュメントは神秘家の衝撃に耐えて、集団が崩壊するのを防ぎ、衝撃のうちの創造的側面を識別して取り入れなければならない。この識別に失敗したときの行く末にはいくつかのコースがある。エスタブリッシュメントが衝撃にもちこたえられずに破壊され、不安が高まった集団があらぬ方向へ迷走し、ついには崩壊する。また既存のやり方にしがみつき神秘家を閉め出すことで、集団全体が活力を失い、やはり崩壊する。すべて神秘家の爆発的影響力をもつ破壊的側面に関係しており、これにより集団の敵意が刺激される。逆もまた真なりで、このような関係を Bion は寄生関係と呼んでいる。羨望に満ちた関係が宿主も寄生体も両方破壊してしまうことによる。エスタブリッシュメントまたは制度は常にこの重圧にさらされている。

この重圧を引き受けるのはエスタブリッシュメントの中の数々の分派・党派である。キリスト教の黎明期でいえばキリストを支持する分派と反対する分派である。神秘家と集団の葛藤は、ここで分派同士の葛藤に置き換えられる。分派がぶつかりあう過程で新しい集団が形成され、神秘家を contain する新しいエスタブリッシュメントが生まれる。Bion は次の例を挙げている。「あるキリスト教エスタブリッシュメントは異教の祭りを引き継ぎ、敵意を和らげることで崩壊した構造を再建し、その持続を確実なものにした」もちろん異教に反対する分派もあったろう。呑み込まれてしまう分派もあったろう。しかしその中でいわば第三の道として異教と一部和解し、その知恵と活力を取り入れるのに成功した分派が生き残った。これは共生関係の一例となろう。

このように♀♂を集団現象に適用することにはいくつかの利点があるだろう。ひとつは歴史を揺るがすような強烈な情緒パターンを、規模こそ違え面接場面で生じているパターンと重ね合わ

せることができること。これにより面接場面での出来事が孤立した出来事ではないという感覚を得ることができる。もうひとつは歴史上の多くの人や制度を、ひとりの心の中の要素群になぞらえることで、それまで気づかなかった要素に注意が向くことである。

5. ♀♂パターンの様々な現れ

♀♂パターンの現れの代表例として、言語形式と集団現象を見てきた。Bion はほかにもさまざまな現象にこれを適用している。いちいち詳しく検討することはできないが、そのいくつかを挙げておこう。

まずは記憶としての♀である。Bionによれば記憶は感覚経験の背景を持つ。従ってすでに飽和しており、新しい観察事実をつけ加えることができない。いわば動かぬ先入観のようなものとして働き、セッションにおいて分析家の直観を妨げる。ゆえに記憶は分析現場では有害であるとす。これが有名な“No memory, no desire, no understanding”という態度の推奨につながる。

「内と外」についての適用は明らかであろう。閉所恐怖—広場恐怖にも関連する。「集団の中に」「人の中に」「分析の中に」「行動化 (acting-“out”）」といった表現を取る場合は、♀♂の情緒パターンが働いている可能性がある。また「仲間に入れるか排除するか」にも関連する。集団でいえば分析家自身がどの集団に所属し、どこには所属しないかの決定にかかわってくる。誰を仲間にして誰を排除するかということでもある。個人の人格でいえば、どのような心的特性を自分のものとし、どのような特性を排除するか決定である。

分析が不安定で揺れていても、安定した、恒常的な要素があるものである。それは患者が毎回規則正しくセッションに通う、ということだけかもしれない。これが集団モデルでいうエスタブリッシュメントに当たる。これが神秘家の観念に相当する要素を contain する機能を担う。逆に安定要素の圧力で神秘家の観念に相当する要素が破壊されることもある。

思考と行動の葛藤は永遠のテーマであろう。快原則と現実原則の葛藤と言ってもよい。Bion は行動を感覚的満足と結びつけている。従ってその究極的目標は肉体が生き残ること (physical survival) である。これに対して精神分析は心的「活動」に関わる方法であり、ここに葛藤が生じる。Bion はこの葛藤が集団モデルで表現されている例として、ローマの陥落と、それがキリスト教の流布のせいだとする発言に反駁したアウグスティヌス (「神の国」における) を挙げている (AI, 121)。臨床現場ではむしろ思考と行動の関係性を識別するために♀♂モデルが役立つ。すなわち共生・共生・寄生関係の識別である。

実際の分析場面では分析家と被分析者が交互に♀と♂の役割を取っているさまを観察し、各瞬間の♀♂の関係性を観察するのがよいとしている。

このように♀♂のパターンの現実への現れは非常にさまざまな形を取る。Bion は生きた現実の中で生じていくこのさまざまなバリエーションを示唆したかったのであろう。しかし同時に、♀♂パターン自体は特定の空間や時間を超えて一定である。それが引き起こす感情もいくつかのカテゴリーに分類することができる。この点を取り上げ、何もかもを♀♂に当てはめて♀♂に還元しているという誤解を受けるとすればそれも正しくない。そうではなく、Bion は精神分析的観察と理解におけるひとつの基本的な「型」を抽出しているのだと思われる。ゆえに♀♂が何かを

説明しているわけではない。♀♂モデルそのものが臨床家にとって「記憶」になり、臨床場面での直観を妨げるのであれば本末転倒である。♀♂モデルは従って、習得されるべきひとつの「型」であり、十分習得され身についたら捨て去られるべきものなのであろう。

「不可欠な経験はこの本を読むことではなく、精神分析の中の、この公式化（♀♂）に近似の、現実の出来事と突き合わせることである（AI, 109）」

文 献

- Bion, W. R. 1961 *Experiences in Groups*. Tavistock Publications, London.
- Bion, W. R. 1962 A theory of thinking. *International Journal of Psycho-Analysis*, 53. (TT)
- Bion, W. R. 1962 *Learning from experience*. William Heinemann, London. (LE)
- Bion, W. R. 1963 *Elements of psycho-analysis*. William Heinemann, London. (EP)
- Bion, W. R. 1965 *Transformations*. William Heinemann, London.
- Bion, W. R. 1967 *Second thoughts*. William Heinemann, London. (ST)
- Bion, W.R. 1970 *Attention and interpretation*. Tavistock Publications, London. (AI)
- Klein, M. 1946 Notes on Some Schizoid Mechanisms. in *The Writings of Melanie Klein, Vol 3*, Hogarth, London.
(小此木啓吾ほか監修 1985 メラニー・クライン著作集4 妄想的・分裂的世界 誠信書房)
- Klein, M. 1957 Envy and Gratitude. in *The Writings of Melanie Klein, Vol 3*, Hogarth, London.
(小此木啓吾ほか監修 1996 メラニー・クライン著作集5 羨望と感謝 誠信書房)
- Spillius, E. B. 1988 *Melanie Klein Today*, Vol 1. Routledge, London.
(松木邦裕監訳 1993 メラニー・クライン トゥデイ② 岩崎学術出版社)

(博士後期課程)